

『砂の時間』

作・島田三樹彦

『砂の時間』

●時代・・・現代

●場所・・・海辺にある町

●登場人物

高山 健一・・・定年間近の新聞記者

高山 晴子・・・健一の妻・病氣療養地中

館山 里子・・・別荘の経営者・独身

館山 里恵・・・里子の娘・独身

●舞台

基本的には簡素で抽象的な舞台空間で上演することが望ましい。椅子・テーブルなどの小道具やオブジェを用いる場合は、無彩色で容易に移動できるものがよい。場面転換は短時間で行い、出来れば暗転を用いない。また、緞帳も使用しない。既成のイメージを避けることが、かえって観客の自由な想像力を喚起することになり、舞台の時空がより濃密になると考えるからである。

開場した時点から、第一場・砂浜の設定を活かしておく。

▲開場時から聴こえていた波の音が次第に大きくなってくる。聞いているだけで心が安らぐような、しばらくすると下手から健一が、見るからに休暇中といった様子で砂浜を歩いてくる。そのすぐ後ろから晴子が、健一の足跡を踏みしめるように辿り歩きしながら、楽しそうについてくる。晴子の顔は、子どもが遊びに打ち興じている時のように輝いている。

健一 いいもんだなあ・・・
晴子 うん。

▶健一は、晴子が自分の足跡を辿っていることに気がついていない。晴子、バランスをくずしそうになるが、何とか持ちこたえて、

晴子 これって、結構むずかしいもんね。
健一 むずかしい？
晴子 あっ、振り向かないでッ！

▶健一が振り向くと同時に音楽止む。健一、晴子が晴子が静止したままピクリともしないのを見て、

健一 なにやってんだ？
晴子 振り向かないでって言ったのに・・・。

▶健一、晴子の肩越しに自分たちが歩いてきた足跡を見て、晴子が自分の足跡を辿ってきたことに初めて気づき、

健一 難しいって・・・このことか？

晴子 そうよ。

健一 一步もはずさずに？

晴子 ここまではね。

健一 ふーん、たいしたもんだ。

晴子 でしょ？

健一 自慢するほどのもんじゃないが、君にしては上出来だ。リハビリに丁度いいじゃないか。

晴子 そうかしら。あなたとやらしてもいいけど・・・あなたは誰としてるの？

健一 してないよ、誰とするんだよこんなこと！

晴子 なあんだ、してないの。いかいにも記者らしいなって思ったんだけど。

健一 どころが。

晴子 記事がなかなか書けない時や、疲れたときなんかちようどいいじゃない。道具はいらないし、どこにいてもできるでしょ？ やっぱり新聞記者の考えることは違うなって・・・感心してたのよ、私。

健一 ふーん、なるほど。確かにそういう工夫をしている人はいる。いるにはいるけどね、そういう場合は形相が違うんだよ。何て言ったらいいんだろうな。それこそ鬼気迫るものがだね、全身から湯気のように立ちのぼってだね、誰が見ても、ああ、頑張ってるな、今が一番大変なところなんだなって、一見ただけでわかるもんなんだ。

晴子 あなたにもわかるの？

健一 そりゃあ、わかるさ。同僚だからね。

晴子 ふーん。じゃあ、いいもんだって言ったのはなんこと？

健一 ただブーツとすることさ。

晴子 なんだ、似たようなもんじゃない。

健一 君が同僚じゃなくてよかったよ。それで？ きみはどっちへ行きたいんだ？

晴子 こっちにするわ。

健一 なんだ、もう戻るのか。

晴子 ううん、そうじゃないの。どんなふう歩いてきたのか確かめてみたいの。

て

▶と同時に音楽が流れ、晴子は先ほどと同じような調子で、いままで歩いてきた足跡を辿りはじめる。
今度は健一が晴子の足跡を辿りながらついていく。

健一 なんか妙な感じがするな。もっと普通に歩けないのか。

▶音楽、テンポがだんだん速くなってくる。晴子の足取りも音楽に合わせて速くなっていくが、健一は晴子に合わせて必死について行く。

晴子 あなたの足跡を辿るとこうなるの。

健一 変だぞ、かなり。

晴子 おかしい？

▶晴子、健一の意表をつくような歩き方をしたりする。辛うじて晴子の動きについて行く健一、息を切らせながら、

健一 人が見たら笑うかもしれないな。

晴子 でも、あなたは笑っちゃだめよ。

健一 どうして。

晴子 だって、これ、あなたの足跡よ。

健一 えっ？ 難しいこと言うなよ。一番下のは確かに僕のだ。しかしだね、二度にわたって君に踏まれた今となっっちゃ、この足跡はもう君の所有物と言ってもいいんじゃないのか？

▲晴子、ピタッと止まる。と同時に音楽も消える。健一、晴子にぶつかりそうになりながらも、どうにか止まる。晴子、足の位置を動かさずに振り向くと、

晴子 あなたの意思は損なわれちゃいないはずだわ。ほら、よく見て。左足は進行方向に真っすぐ出てるでしょ？ でも右足はそっぽを向いてるの。わかる？ 変形がに股！

健一 変形がに股？

晴子 そうよ。どっちへ行こうかなって迷いながら歩いてるわ。左足と右足が別々のことを考えてるのよ。

健一 難しいこと言うんじゃないって言っただろ。この足はブーツとしながら歩いてた時のもんだ。なにも考えちゃいない。第一、足が考えるもんかッ。

晴子 記事は足で書くもんだって、いつも言ってるじゃないの。

健一 それとこれとはね、

晴子 同じことだわ、

健一 無茶言うなよ。

晴子 いまさら言いわけするつもり？ 遅すぎやしない？ もうすっかり身についてしまってるわ。

健一 なんかグサツとくるもんがあるな。君がほんとに確かめたいものは、一体何なんだ？

晴子 いろいろ・・・なんだか疲れちゃった。

健一 おっと！ 休憩だ、休憩にしよう！ 君が病み上がりだってこと、忘れてたよ。

▶晴子、波打ち際を離れて、乾いた砂の上に座る。健一、その晴子の足跡を辿りながら、

健一 ここからは君だけの足跡だ。歩幅、意外に大きいんだな。

▶健一、晴子と肩を並べて座る。

健一 大丈夫か？

晴子 ええ、大丈夫・・・あなたと海に来たの、何年振りかしら。確か、結婚する前よね。

健一 そうだったかな。

晴子 そうよ。あの時あなた、なんて言ったか覚えてる？

健一 えっ？ 君は覚えてるのか？

晴子 もちろんよ。あなたは？

健一 そんな・・・いきなり言われたって、

晴子 僕は、波の音を聞くと、

健一 よせよ。

晴子 思い出した？

健一 なんとなくね。

晴子 ウソ。忘れたって顔に書いてあるわ。

▶晴子、左手で砂を握ると、目の高さに持ち上げ、砂時計のように少しずつ膝の上にこぼす。健一、それをじっと見ている。晴子、落ち切った砂を見ながら、

晴子 私が今日まで生きてこられたのは、そのおかげかもしれない。

健一 ほう。僕はそんなにいいことを言ったのか。

晴子 (膝の砂を落し) きっと忘れてると思ったわ。約束はなんとか実行してくれたから、許してあげてもいいかな。

健一 約束？

晴子 聞きたい？

健一 いや、いい。どうやら約束は守ったようだから。

晴子 全部じゃないけど……でも、それは私のせいもあるから、五分五分の引き分けかな。こういうのなんて言ったっけ？

健一 イーブン。

晴子 そうじゃなくって、もつとスカツとした言い方があるでしょ？ うらみっこなしていうような、

健一 ああ、チャラ、かい？

晴子 ええ、それぞれ。チャラにしましよ。

健一 なんだか得したような気分だな。

晴子 ……。(寂しげな様子)

健一 どうした、怒ってるのか。チャラにしたんだろ？

晴子 そうじゃないの……あれからもう三十年たったなんて信じられないだけ……いろいろあったわねえ……今日、散歩してて気がついたんだけど、私、今まであなたの前を歩いたことなかったの……後ろを歩いたことも。

健一 おいおい、どうしたんだ？ 今日はやけに難しいことばかり言うんだな。

晴子 足跡をね、辿ることに夢中になっていたらだんだんいい気持ちになっていったの。あなたと同じ道を歩いてるんだって……。

健一 体が順調に回復してるのかな。

晴子 私、初めてなの、こんな気持ちになったの……。変でしょ？

健一 変、なのか？

晴子 変だわ。普通の夫婦はいつもそういう気持ちで暮らしてるはずよ。私だって、今までずーっとそのつもりでいたんだけど、微妙に違うのよ。

健一 同じだよ。君は、ほら、体があまり丈夫じゃなかったからね。気持ちの上では充分わかってたことを、
たまたま今日、体で実感したってわけだ。

晴子 ……あなた、どうして私と結婚する気になったの？

健一 えっ！ そんなこと聞いてどうするんだ。いまさら後悔したってもう手遅れだぞ。

晴子 だから聞けるのよ。考えてみたら、私……あなたに何もしてあげてなかった。病氣ばかりして……
結婚する前からよ。そんな私となぜ？

健一 ……。

晴子 あなた、あの足跡見てなにか思い出さない？

健一 ビール、飲みたいな。

晴子 へたくそ！ 話題を変えるときは、もっとさり気なくしなくちゃ。

健一 ハハ、ほんとに飲みたいんだ。

晴子 帰ってからね。ほら、見て……。

▶晴子、波打ち際の足跡を指さす。晴子と健一、しばらく足跡を見つめている。

晴子 だんだん消えていくわ……。

健一 (腕時計を見て) 満ち潮なんだな……いい音だ。ほら、あの辺り。引いてゆく波と寄せる波がぶつ
かった瞬間、どっちの波も消えちゃうだろう？ あれがいいんだ。とまどっているような、それでい
て、たゆたっているような……あの瞬間がね、僕は好きなんだ。(間) たゆたっている波のように
ね、穏やかに生きていくことができたなら幸せだろうなって……昔からずっとそう思ってたんだ。

晴子 できた？

健一 (首を横に振って) この波の単調な音がね、心臓の鼓動のように聞こえたり、寄せては返すその繰り返しが毎日の暮らしそのもののように思えたりしてね・・・本当はそれが一番難しいことなんだけどさ。

晴子 足跡・・・消えちゃった・・・私たちが消えたような、そんな気がしない？

健一 三十年前もこんな話をしてたような気がするな。

晴子 ええ・・・あれからもう三十年・・・(健一を見てほほ笑み)今の感想を、そうね・・・十二文字で述べよ。

健一 おいおい、勘弁してくれよ、久しぶりの休暇だぜ。

晴子 いいじゃない、たった一行よ。

健一 簡単に言うけどね、

晴子 能書きはいらない。

健一 厳しいんだな。

晴子 当然。人生の中間試験ですからね。

健一 うーん・・・忸怩たるものがあります。

晴子 (指を折りながら) じく・じ・た・る・も・の・が・あ・り・ま・す・ま・る。うん、伊達に新聞記者はしとらんようね。

健一 当然。

晴子 なんとたいして忸怩たるものがあるの？

健一 さあ・・・おのれ自身としか言いようがないな。

晴子 あの足跡のように消せたらいいと思う？

健一 そりゃ思うさ。しかし、それをしちゃいけないんだろうな。

▲健一と晴子は無言のまま、それぞれの想いで波打ち際を見ているが、いつしか二人の視線は海の沖合に向けられている。波の音だけが静かに聞こえている。晴子、両手で体を抱え込むようにして、

晴子 あなたと初めて海に来た日・・・三月の第三土曜日だったわ・・・寒かった・・・。

健一 よく覚えているね・・・。

▶晴子、健一があの日のことを覚えていないのかと思い、寂しそうな顔で健一の横顔をみるが、すぐ気を取り直して、

晴子 砂浜があんまり広いんで、私びっくりしたのよね。大潮だって、あなたが教えてくれたわ。そのときまで私、大潮ってというのは、満潮の時のことを言うんだとばかり思ってたの。あなた、潮干狩りには一番いい季節だって言ったの、覚えてる？ 今だから言うけど、ずいぶんいい加減なことを言う人だなあつて思ったわ。だって誰も潮干狩りなんてしてなかったじゃない。

健一 春休み前だったからさ。一週間後にはどっと人が繰り出していたはずだよ。

晴子 潮干狩りに？

健一 そうだよ。

晴子 今でもそう？

健一 だと思っよ。

晴子 そーなの……どうしてあの時そう言ってくれなかったの？ 私まだ潮干狩りしてたことないのよ。

健一 だって、君はまったく興味を示さなかったじゃないか。

晴子 ちゃんと説明してくれてたら、やってたわよ。あなたって今でもそういうところがあるわ。自分じゃ気がついてないでしょうけど……。

健一 君は……海、それほど好きじゃないと思ってたよ。

晴子 好きよ。(沖を見ながら) 私海は昔からずーっと……ずーっと好きだったんだからッ！

▲健一、晴子が結婚以来、海に来ようとしなかった理由が自分にあつたことに気づき、話が先に進むことを避けるように、

健一 アサリの酒蒸しでビールが飲みたくなつたなあ。

晴子 話をそらさないで。

健一 えっ？ まだあるのか？

晴子 あるわ、大事なことが。さっきの質問にだってまだ答えてないじゃない。

健一 質問？

晴子 あっ、動揺してる！

健一 し、してないよ。

晴子 隠してもダメ。照れくさいの？

健一 あの質問にはもう答えたんじゃないの？

晴子 ほら、わかってるくせに・・・まだよ。

健一 またにしよう。

晴子 だめ。

健一 あまり長く潮風に当たっていると体に良くないぞ。

晴子 ウソ。潮風が体にいいって言ったのは誰でしたっけ？

健一 ビールを飲みながらっつのは、どうだろうね。

晴子 だーめ。素面の時じゃなきゃ。

健一 (笑う) 足跡のことだっけ？

晴子 それもあるけど、もつと大事なこと。今、笑ってごまかそうとしたでしょ、ちゃんとわかってるんですからね。口頭試問、高山健一、あなたはなぜ晴子と結婚する気になったのですか？

健一 (笑いながら) なんだか尋問されてるみたいだな。

晴子 言っときますけど、黙秘権は認めませんからね。

健一 あれだつてね、容疑者を尋問するときは、言いよんだり、動揺したりした瞬間を逃さずに、たたみかけるように問い詰めていくのがコツなんだつてね。入社して三年目ぐらいの頃だったかな、サツマわりをしてたときにね、

晴子 はいそこまで。何か言いたくないわけでもあるの？

健一 そうじゃないが、できれば言わないで済ませたいなあって・・・なまじつか言葉にすると嘘になってしまうことだつてある。

晴子 新聞記者のお言葉とは思えない発言ですこと。言葉はあなたの商売道具でしょ？

健一 痛いところ突いてくるねえ。

晴子 何か都合の悪いことでもあるんですか？

健一 ないといえば嘘になるだろうな。

晴子 あなたってほんとに不器用ね。私が喜びそうなことを言っでごまかしたっていいのに……。

健一 そういうことは、君にはしたくないな。

晴子 ほかの人にはしてるの？

健一 その場の成り行きで、無意識のうちにしてたことはあるかもしれない……。

晴子 あのね、今言ってくれないと……私、あなたを一生恨むかもしれない……そんな気がするの。

健一 そいつは穏やかじゃないな……(立ち上がった) なぜ君と結婚したか、だったよね。

晴子 ええ。

▶健一、さつき歩いた足跡を、波打ち際まで辿りながら、

健一 なにしる三十年前のことだからなあ……。

▶健一、波打ち際まで来ると、晴子に背をむけたまま足元を見つめている。ややあって、

健一 記憶というのは、時間がたつにつれて、少しずつ変わっていくって言うじゃないか……自分の生き方に合わせて、過去を微調整しているのかね……どうせ話すんなら、できるだけ正確に、と言っても、できるわけないか……まだ残ってる足跡があるよ。

晴子 どこ？ (と立ち、健一の傍らに行き)

健一　そこ。

晴子　あら、ほんと・・・でも、消えるのは時間の問題ね・・・足跡は微調整がきかないかわりに、潮が満ちてくれば波が消してくれる・・・羨ましい？

健一　そうしたい記憶もないわけじゃないんだがね・・・。

晴子　私のこと以外ならいいわよ。でも、今はだめ。あなたと会ったのは、藤田さんと夏子の結婚式の時が初めてなんだけど・・・覚えてる？

健一　あの時はまだ紹介されてなかったと思うな。藤田先輩の新居を訪問した時じゃなかったっけ？

晴子　やっぱり・・・私の勝ちだわ。

健一　勝ち？　なんだいそりゃ。

晴子　夏子がお見舞いに来てくれた時にね、あなたが私を見染めたのは夏子の結婚式の時だったかどうかって、賭けをしたの・・・夏子はね、式の後みんなで記念写真を撮ってた時、あなたが私のことをじっと見つめてたから絶対その時だって言うのよ。（笑って）夏子に電話しなくっちゃ。

健一　ふーん、先輩の結婚式でねえ・・・。

晴子　あとで夏子が藤田さんに話したららしいの。そしたら藤田さんが、新居訪問ってことで二人を会わせてみたらどうだいって言ったんですって。

健一　ふーん。じゃ、僕たちは見合いをさせられたわけだ。しかし、あの日はほかに何人かいたぞ。

晴子　そうよね。あの時紹介されたのはあなただけじゃなかったし、それに私たちが結婚したのは二年も後のことだって、夏子にそう言ったのよ。そしたら夏子はね、ふーんって妙に感心して、高山さんはどうして晴子と結婚する気になったのかなあって、いかにも不思議そうに言うの。私ね、その時は夏子と一緒に、ほんとねえって笑ってたんだけど・・・今日、あなたの足跡を辿ってたら・・・。

健一 だんだん不思議になってきたというわけか。

晴子 ううん、夏子の言っていたことを思い出したの、学生時代・・・あっ！

▶健一、晴子が叫ぶと同時に足元を見ると、慌てて後ずさりする。晴子も一緒にさがりながら、

晴子 ウワーツ、いい気持！

健一 濡れちゃったよ・・・(晴子を見て) この感じ、久しぶりだなあ・・・。

▶健一、砂浜に腰を下ろして靴を脱ぎ、中の水を出すと、靴下を脱いでズボンの裾をまくり始める。
それを見ていた晴子も同じようにして、

晴子 最初からこうすればよかったわね。

健一 うん。なんせ、海に来たのはひさしぶりだからね。

晴子 あなた、これも藤田さんのお陰ね。転地療養なんて贅沢なことできるなんて思わなかったもの。二週間で五万円の貸し別荘なんて、今どき信じられない安さだわ。

▶健一、ズボンの砂を払いながら立ち上がった、

健一 まったくだ。君との約束も果たせたことだしね。

晴子 足が濡れたときでしょう？

健一 少しずつ、だんだんに、といったところかな。さて、どうする？

▶健一、晴子と顔を見合わせる。晴子、波打ち際を見てニコツと笑うと、

晴子 少しだけ、ならいいわよね。

健一 少しだけだぞ。

▶二人、波打ち際に行き、気持ちよさそうに歩き出す。健一、晴子の後ろをついていく。

晴子 いい気持ち……。

健一 いいもんだなあ……。

▶晴子、健一のその言葉を聞いていきなり振り向き、健一の足元を見る。健一、ピタツと止まり、

健一 するの？

晴子 してるのかと思った。

健一 フリースタイルだけど。

晴子 お好きにどうぞ。

▲二人、また同じように歩き出す。

健一 この感触、何とも言えないな・・・そういえば、子どもの頃はよく裸足で遊んでたなあ・・・まだ昨日のこのような気がするよ・・・時間って、歳とともに加速度がついてくるって言うけど、ほんとにそうだよ。この歳になってみるとそれがよくわかる。

晴子 反対だといいのにな・・・。

健一 うん、でも実際にそうになったら、今度はじれったく感じたりするんだろうな。
晴子 私はその方がいい・・・じれったいくらいに時間があれば・・・。

▲健一、晴子の言っている意味がわかり、元気づけるように、

健一 大丈夫だよ、時間はたっぷりある。

晴子 そうね・・・ああ、波が足の上をすべってくわ・・・あ、くすぐりたい、足の裏を砂が流れていくの・・・あなたは？

健一 水虫、治るかな・・・。

晴子 もオー、ほかに言うことないの。

健一 気をつけて歩かないと、ガラスの破片があるぞ。

晴子 そういうことじゃなくって、

健一 わかっているよッ。いい気分だ・・・歌いたくなるような、

晴子 歌ったら？ 誰もいないわよ。

健一 君がいるよ。

晴子 恥ずかしいんでしょ・・・。

健一 ビール・・・持ってくるんだったなあ…。

晴子 往生際が悪いんだから・・・早く話しちゃったら？ すぐ帰って飲めるわよ。

健一 君の声がきれいだったからさ。

晴子 まさか！ (立ち止まって) ビール飲みたさにいい加減なこと言って。

健一 ほんとだよ・・・帰ろう。今日はこれぐらいにしといた方がいい。

▲二人、砂浜に上がり、靴を置いてあるところまで戻りながら、

健一 君は今でもきれいな声してるよ。落ち着いていて、僕の耳には心地いいんだな。

晴子 (照れて) そういうことじゃなくて、

健一 まあ、聞きなさい。それから笑顔もきれいだな。性格もいい。両親に愛されて、大切に育てられてきたことが、一目ですぐにわかったよ・・・僕はね、騒々しい環境に育ったんだ。小さい頃から穏やかな生活にあこがれていた・・・君と一緒にいるだけで心が和んでくる。

晴子 (照れ隠しにおどけて) 褒めすぎじゃない？ 誰もいなくてよかった・・・。

健一 まだ終わってないよ。

晴子 えっ？

健一 どこが気に入ったからってことじゃなくてね、そういった長所を持っている君の存在そのものっていうのかな、それが僕には好ましく思えたんだ。

晴子 (誰に言うともなく) この足跡がどこまでも続いていくといい・・・そして、ふと気がついたら、いつのまにか小さな足跡が混じっている・・・その足跡を見るために、いつかまた砂浜にこないか？

健一 思いっきり、キザだな。

晴子 誰もいなかったからよ。

健一 三十年前、確かに僕はそう言った……。

晴子 私……あの時心に決めたの。この次に砂浜に来るときはきつとって……小さな足跡を想像するだけでも元気がでたわ……嫌いなものだっておいしく食べられるようになったし、ヨーガ教室にも通ったわ。丈夫な体になって……早く海に来たかった……。

健一 君の命と引き換えじゃなんにもならん……波打ち際を、一緒に歩いていると思えばいい……。

晴子 それじゃ小さな足跡が……つかないじゃない……。

健一 足音は聞こえている……。

晴子 足跡は、波に消えたって言うの……そう思えって言うの？

健一 僕たちの足跡はまだ続いている……それでいいとしようじゃないか……行こう……。

▲二人、靴を取ると、肩を並べ、砂浜をゆっくり歩きはじめる。

晴子 (努めて明るく) やつと、ビールが飲めるわね？

健一 うん。喉がカラカラだ。柄にもないことを言い過ぎた。

晴子 あなた、

健一 うん？

晴子 ほんとはね、結婚する前のことが聞きたかったの……あなたには学生時代に好きな人がいたって、夏子に聞いたの。

健一 難しいこと言うんじゃない。

晴子 藤田さんが知ってる人だつて。

健一 自分のことを言ったんだ。

晴子 どっちが？

健一 どっちも、こっちもツ。

▲健一と晴子、話しながら下手に去って行く。波の音が次第に大きくなる。

— 第一場、終わり —

●第二場Ⅱ海を見下ろすことができる貸別荘

◀別荘の間取り

舞台上手は居間兼食堂になっており、正面奥に玄関、寝室へ通じる扉がある。台所は上手舞台袖。舞台中央に、居間とはガラス戸で隔てられたベランダがあり、下手側に三段の階段がついて、庭につながっている。実際にはテーブルや椅子など、最小限の道具だけを用いること。第一場で健一と晴子が下手に去った後、観客が暗転のイメージを抱かないうちに第二場に入ること。

◀健一が上手からテーブルを運びながら出てくると、テーブルを上手奥に置き、

健一 やっぱりここが一番落ち着くみたいだな。

◀晴子、やはり上手から椅子を一脚だけ持って、ゆっくり出てくる。健一、それを見て駆け寄り、

健一 無理しちゃだめだ。僕がやるからいいよ。

◀晴子から椅子を受け取り、

健一 大丈夫か？

晴子 ええ。(と、明るく笑い返す)

◀健一、椅子をテーブルの下手側に置き、

健一 さあ、ここに座って。

◀晴子、座る。

晴子 やっぱりこっちの方がいいわ。

健一 そっか、元の場所の方がいいか。ベランダ用の椅子があるって言ってたね。どこ？

晴子 庭の物置だって。

◀健一、下手に駆け去る。サンシートを二脚持って戻ってくると、舞台中央にセットする。

健一 これでよしと……。不思議だね、これを置いたとたん、別荘になっちゃった。

◀健一、下手側のサンシートに座ると、大きな伸びをして、

健一 こりやもう夏だね。

◀健一、午後の海を眺めてぼんやりしている。晴子は居間から、健一を見るときもなく見ている。別荘

の後ろは松林になっているとみえ、風の音でそれとなく知れる。ベランダから見える砂浜に打ち寄せる波の音が、松風に重なるように聞こえてくる。

晴子、居間からベランダに出て来て上手側のサンシートに座る。

晴子 いい天気・・・。

健一 やつと片付いたな・・・松風に潮騒の音か・・・ありきたりの、と言いたいところだが、僕はここが気に入ったよ。

晴子 私も。南向きで日当たりはいいし、それに管理人さんも親切だし・・・。

健一 そうだ、お礼に行かなくちゃな。

晴子 ええ、ほんとにいい方たちよ。主人は明日になりますって言っただけなのに、こころ細くなりかけたころ、お一人じやお退屈でしょうからって母が申しますから、私でよろしければご一緒にお泊まりいたします、って。気遣いといい、言葉使いといい、今どきにしては珍しく素敵な人よ。

健一 早くお会いしたいね。昨日着いた時に、すぐ行けばよかったかな。

晴子 そうよ。私ね、あなたがここからあの砂浜を見て、オオツ、って言った時、もう行かないなって思ったわ。

健一 それにしてもいい眺めだ。

◀晴子、サンシートから立ち、海の方を見ながら、

晴子 あの砂浜、昨日私たちが歩いた所よね。

健一 うん。近いように思ったんだが、歩いてみると意外に遠かったな。

晴子 犬がいるわ。

健一 どこ？ 見えないけど……。

晴子 座ってちゃ見えないわよ。

健一 一匹？

晴子 ええ。あ、人間が出てた。

健一 人間？（と、思わず立ち上がる）

晴子 どうしたの？

健一 一瞬、どんな動物か想像できなかつた。

晴子 目の前にも一匹いるわよ。

健一 君の言い方が変なんだよ。（サンシートに座る）

晴子 あなた、自分が人間だっていう自覚が希薄なんじゃない？

健一 自身をなくすようなこと言わないでくれ。

晴子 あ、また出て来たわ。

健一 犬かい、それとも人間かい？

晴子 どっちだと思う？

健一 うーん……今の言い方からすると……人間。

晴子 当たり。男？ 女？ どっち？

健一 うーん……さつきは若い女性だったから……。

晴子 あなた、視力いくつ？

晴子 2点ゼロ。うーん……。

晴子 単なる老眼ね。

健一 えっ？

晴子 どっち？

健一 男。

晴子 残念でした。

健一 そんなはずはないんだがな。(立ち上がって見る) ほんとだ。あの人、こっち見てないか？

晴子 まさか……。

健一 僕たちに手を振ってるぞ。

晴子 あら、ほんと。

健一 手を下ろしたぞ……今度は二人で見てるよ……君、手を振ってみたら。

晴子 振り返されたらどうするのよ。電車に乗ってるわけじゃないんですからね。

健一 部屋ん中へ逃げちゃえばいいさ。

◀ 健一、手を振る。次の瞬間、慌てて手を下ろし、びっくりして晴子を見る。

晴子 私は関係ありませんからね。

◀ 健一、晴子を促すようにして居間に戻ろうとする。その時晴子が、「あっ」と小さく叫んで、振り向きざま砂浜に向かって手を振り、にこやかに笑いながらお辞儀をする。健一、啞然として、

健一 どういうつもりなんだよ。電車じゃないって言ったのは君なんだぞ。

晴子 管理人さんたちよ、きつと。ほら、あなたも振って。

健一 (手を振って) 人違いじゃないだろうね。

晴子 大丈夫。

◀ 健一と晴子、手を下ろすと、ホツとしてサンシートに座る。

晴子 気がついてよかったわ。

健一 僕はなんか悪いことをしたような気分だ。

晴子 ビール、持って来ましょうか？

健一 いいね、飲みたいと思つてたところだ。

◀ 晴子、ベランダから居間を通つて上手に去るが、すぐ居間まで戻つてきて、

晴子 何か召し上がる？

健一 いや、ビールだけでいい。

晴子 そう。

◀ 晴子、再び上手に去る。健一、サンシートに座つたまま

首を少しづつ伸ばして、砂浜の様子を伺っている。そこへ晴子がお盆に缶ビールとコップ二つ、菓

袋を載せて戻ってくる。

晴子 もう誰もいないわよ。(お盆を健一の足元に置き) ニニでいいでしょ？
健一 うん。

◀晴子、薬袋からカプセルを出す。健一、缶ビールを開けてコップに注ぎながら、

健一 まだ飲まなきゃいけないのか？

晴子 ええ、ずっと……。

健一 そうか……。

◀二人、それぞれ飲む。

健一 うまいッ！ やっと休みって感じがするな。

晴子 ほんと……何年振りかしら、こんなにホッとしたの。来てよかった……。私、ずっと病院の天井ばかり見てたから、なおさら……。

健一 お互いに、ひと休みってところかな。高さはともかくとして、いつの間にか山の頂上に着いていた……そんな気がするよ。

晴子 頂上ねえ・・・あつという間だったわね。どう眺めは？

健一 まあ、いいんじゃないか。

晴子 あなたが目指したとおりの山だった？

健一 連山のひとつつとところかな。

晴子 前から一度聞きたいと思ってたんだけど、あなた、私と結婚するときに、登る山を変えたんじゃない？

健一 また昨日の続きかい？

晴子 振り返ってみるにはちょうどいい場所でしょ？

健一 僕なりに満足している。それでいいじゃないか。

晴子 私もここに来る前まではそう思ってたわ・・・このまま下山してもいいって。でもね、あなたが言う

ようにこの山が連山の一つだとしたら、登ろうとしていた山の頂上も、尾根続きにあるんじゃない？

藤田さんがね、

健一 また藤田さんか・・・いったい君は先輩に何を聞いたんだい。

晴子 私・・・下山途中でロープウェイに乗るかもしれない。

健一 なんだいそりゃ。山つてのは自分の足で登って、自分の足で下りるもんだ。どうしても歩けなくなっ

たら、僕が背負ってやる。何のために一緒に上ってきたと思ってるんだ。

◀健一、照れ隠しに、コップに残っていたビールを一息に飲み干し、立とうとするところを晴子に制される。

晴子 ビールでしょ？（上手に去りながら）一本でいい？ 二本？

健一 一本。

◀ 晴子が上手に去るのと入れ違いに、庭先（下手）から館山里子が現れる。

健一は砂浜の方を眺めていて気がつかない。里子、健一の背中に声を掛ける。

里子 こんにちは。

健一 ん？（びつくりして振り向く）

里子 ごめんなさい、驚かせてしまって。

健一 （慌てて立ち上がり） いやいや・・・どうも、どうも・・・。

◀ 健一、頭を掻きながら、深々とお辞儀をする。晴子、上手から居間に差し掛かったところで二人に気づくが、また上手に去る。

里子 あのう、管理人の館山と申します。庭先から大変失礼とは存じましたが、

健一 いえいえ、あつ、管理人さん？（再び頭を下げ） どうも、高山です。こちらこそ先ほどは大変失礼をいたしました。

里子 はい？

健一 えっ？（と絶句するが、すぐに胸の前で小さく手を振る）

里子 （健一の手を見て） あのう・・・先程と申しますと？

健一 えっ！ あつ、いえいえ、ちよつと、その、家内を、

里子 奥様にはもう、

健一 あ、そうでしたね。でも、ビールを、

◀ 里子、動転している健一を見て思わず吹き出しそうになるが、やっところらえると、

里子 あの、前を通りかかりましたら、お姿をお見かけしましたものですから、ご挨拶をと……。

健一 それはどうもご丁寧……（再び、頭を深々と下げる）

里子 （笑いながら）高山さん？

健一 はい？（と、初めて里子の顔を落着いて見る）

里子 お久しぶりでございます。

健一 えっ？……あつ、里子さん？ 館山、里子、さんですか？

里子 はい……。

健一 いやあ、お元気でしたか……あれからどうなされたんですか。僕はずいぶん探しました……。

◀ 健一、後は言葉にならず、里子を見つめている。里子、まだ事情が飲み込めていない様子の健一に、
噛んで含めるように、

里子 奥様からご予約のお電話を頂きましたとき、陽介さんのご紹介とお聞きいたしましたので、ひよつと
したらと思っておりました。でも、おいでになったのは奥様お一人でしたから、お会いしてみるまで
はと気にかかっておりましたが、やっぱり……一目で高山さんとわかりました。

健一 いやあ、僕は・・・突然でしたから、頭の中が真っ白になっちゃって・・・えっ？ それじゃ、里子さんがこのの？

里子 はい。それじゃ、陽介さん、いえ、藤田からは何も？

健一 ええ。でも家内はいろいろ聞いていたみたいですね。僕はただ、その、とにかく藤田先輩が良く知っている所だからと・・・藤田先輩とは、あの、今でもお付き合いが？

里子 まあ、それもご存じなかったんですか。お付き合いもなにも、藤田は私の従兄ですよ。

健一 えっ！

◀里子、絶句したまま呆然としている健一に頭を下げ、

里子 高山さんにはなんとお詫びしてよいのやら・・・藤田には、どのようなことがあっても、高山さんにだけは何も話さないでほしいと頼んであったのです。まさかそこまでは・・・どうか、お許しください。

健一 なぜ、僕にだけなんですか？

◀晴子、ビールを持って上手から出てくると、初めて気がついた素振り、

晴子 まあ、管理人さん！

◀健一と里子、晴子の声にハッと振り向く。一瞬とまどっている健一の横で、落ちて着いて晴子に一礼

する里子。晴子、缶ビールをお盆の上に置いた後、

晴子 奥にいたものですから気がつかなくて、失礼しました。先日は大変お世話になりました。(と、一礼する)

里子 いいえ、とんでもございません。ちょっと通りましたものですから、ご挨拶をと……。

晴子 こちらからお礼に伺わなければなりませんのに、ご丁寧な恐れ入ります。あなた、

健一 あ、そうでした、お嬢さんがわざわざお泊り下さったそうで、いや、ほんとにお世話になりました。

里子 そんなにおっしゃっていたでは、かえってこちらの方が……。

晴子 さ、どうぞ、お上がりください。

里子 いえいえ、ご挨拶にお寄りしただけでございますから、これで失礼いたします。どうぞごゆっくりなさって下さいませ。(健一に) たしか、一週間のご予約でいらつしやいましたね。

健一 ええ。再来週の木曜日までです。

里子 (晴子に) 宅の方へも、是非ご一緒にお出かけ下さいまし。なんもございませんが、お魚だけは新鮮でおいしいのがございます。二、三日うちにご夕食でも差し上げたいと存じますが、いらして下さいませね。

晴子 ええ、それはもちろん。

里子 よかった。そのときには、娘にご案内させます。それでは、ごめん下さい。

晴子 失礼いたします。

健一 どうも。

里子 (去りながら) 風が出てきたようですねえ……。

◀ 里子、下手に去る。二人、里子を見送ったあと、サンシートに座る。晴子、缶ビールを開け、健一のコップに注いで、

晴子 あなた、

健一 うん？

晴子 ビール、

健一 ああ。

◀ 健一、コップを取り、一息に飲んで、フーッと大きくため息をつく。また自分でビールを注ぎ、焦点の定まらない眼で砂浜の方を見やる。晴子、そんな健一を見ながら、話しかける機会を伺っている様子だが、しばらくしてから、いかにもさりげなさそうに、

晴子 里子さんとは、何年ぶりに会ったの？

◀ 健一、晴子の心の裡を読み取ろうと、晴子の目を凝視する。晴子、それに応えてにっこり笑う。

健一 君は、知っていたんだな・・・先輩に聞いたのか？

晴子 ええ。

健一 いつ。

晴子 二週間ほど前、藤田さんが病院にお見舞いに来て下さった時よ。

健一 なぜ隠していたんだ。

晴子 何度も話そうとしたのに、あなたが避けてたんじゃない。昨日だってそうよ。

健一 あれじゃ何のことかわからんよ。

晴子 私なりに気を使ったつもりなんですけど・・・それで？

健一 うん？

晴子 ほら、もう忘れてる。何年ぶりに会ったの、里子さんと。

健一 そうだなあ・・・最後に会ったのは、先輩たちの歓送会の時だから、三十五年ぶり、いや、六年かな。

晴子 里子さんだって、すぐにわかった？

健一 それが、いきなりこんにはって言われて・・・アッ！（と大声で叫ぶ）

◀晴子も健一が叫ぶと同時に、「キャッ」と叫んで飛び上がる。健一、それにびっくりして、

健一 どうしたんだッ！

晴子 私の方が聞きたいわよッ。何なのいったいッ。

健一 人違いだったんだ。里子さんじゃなかったんだよ。

晴子 あなたって人は・・・今更、人違いだなんて・・・。

健一 違う、違う、（と胸の前で小さく振った手を、砂浜に向かって大きく振りながら）

こつちの話だ、砂浜の人たちは里子さん達じゃなかったぞ。

◀晴子、呆れて無言のまま健一を見ている。

健一 ……急に思い出したんだ。

晴子 いくら急に思い出したからって……わざわざ言わなきゃいけないようなこと？

健一 ……来たらどうするんだ。

晴子 誰が？

健一 手を振ってた人……。

晴子 来るわけじゃないでしょッ。あなたって人は、(気を取り直して) それで？ 再会してどうだったの？

健一 何がどうなっているのか、さっぱりわからん……君の方が、僕より知ってるかもしれない……他に何を聞いたんだ？

晴子 学生時代、あなたが好きだった人だって……里子さんのことなんでしょ？

健一 (あっさりと) うん……しかし、僕の片思いだった。

晴子 振られたの？

健一 そこまでいかなかったんだ……僕が初めて里子さんを見たのは、サルトルの研究会に入った時だったんだが、里子さんにはもう恋人がいて、いつも一緒だった。それが藤田先輩なんだよ。

晴子 でも、里子さんは従妹だって、藤田さん言ってたけど。

健一 いつ聞いたんだ。

晴子 お見舞いに来て下さった時よ。

健一 そうか、君には言ったのか。僕はさつき、里子さんから初めて聞かされたんだ。今でもまだ信じられない……二人はどこから見ても恋人同士にしか見えなかったんだ……二人ともなぜ今頃になって話す気になったんだろう……君はそのあたりのこと、聞いているのか？

里子 (一瞬躊躇するが) いいえ。あとは、里子さんにお子さんが一人いらっしやることぐらいだけ……。

健一 そう……。里子さんは大学を卒業した直後に、突然行方不明になったんだ……。先輩は何を聞いても。知らぬ存ぜぬの一点張りだった。

晴子 なぜなの？

健一 僕を里子さんに寄せ付けなためだとばかり思ってたんだが……。

◀ 下手から理恵がやってくる。皿を載せたお盆を持っている。

理恵 こんにちは。

晴子 あら、いらっしやい。

理恵 母がまだベランダにいらっしやるでしょうからって申しますので、こちらから直接伺いました。ごめんなさい。

晴子 いいえ。さ、どうぞ、どうぞ。あなたがさ里子さんのお嬢さん。理恵さんよ。

◀ 健一、サンシートから立つと、一礼して、

健一 どうも、高山です。

理恵 初めてお目にかかります。館山理恵と申します。むかし母が大変お世話になりましたそうで、

健一 いやいや。ま、堅苦しい挨拶は抜きにして、どうぞ、どうぞこちらへ。

理恵 はい、ありがとうございます。(晴子にお盆のお皿を渡しながら) これ、母がつくったものなんです

が、活きのいいうちにお召し上がりください。

晴子 まあ、お刺身。

理恵 大したものじゃありません。イワシなんです、取り立てですからきつとおいしく召し上がっていただけると思います。

晴子 あなた、ほら。(と健一に見せる)

健一 いや。これは旨そうだな。(理恵に) ちょうど飲んでたところなんです。早速いただきますよ。

あなたもご一緒にいかがですか？

晴子 いいわね。そうして下さると私たちも嬉しいわ。

◀健一、居間からテーブルを持ってくると、すぐ椅子を取って来て理恵にすすめる。

健一 さ、お掛けください。君、ビールを。

晴子 はい、はい。理恵さん、どうぞ。(と、お盆を持って上手に去る)

理恵 どうしましょう、母に叱られますわ。長居しないようにって、きつく釘を刺されてきましたのに……。

健一 何をおっしゃってるんです、子供じゃあるまいし。里子さんには来るなり早々に帰られてしまいました、あなたが、あなたは逃がしませんからね。さあ、どうぞ。

◀晴子、お盆に缶ビール。ウーロン茶、箸、コップなどをのせて戻ってくる。

晴子 (健一に) はい、お箸。さ、理恵さんどうぞ。

◀ 晴子、理恵にコップを手渡し、ビールを注ぎながら、理恵に懇願するような眼差しを向ける。
理恵（小さく頷いて）はい。それではお言葉に甘えさせていただきます。

◀ 理恵、下手側の椅子に座る。晴子、上手側の椅子に座り、コップにウーロン茶を注ぎながら、

晴子 私はこれで。（理恵に）乾杯しましょうよ。

健一 何に乾杯するんだい。

晴子 今日の私たちのためにつてのはどうかしら。ね、理恵さん。

理恵 はい。

健一 いいね。それじゃ、今日の我々のために、乾杯！

◀ 三人、それぞれのコップをテーブルの中央にかざし、飲む。

健一 それじゃ、早速いただきますよ。（と、イワシを食べ）うん、うまいッ。

晴子 まあ、ほんとにおいしいッ。

健一 タレにニンニクが入ってるのかね。

晴子 とつても合ってるわ。いいお味。

理恵 まあ、うれしい。母に話したらきつと喜びますわ。

健一 里子さんも来てくれたらよかったね。

晴子 (頷いて) そうそう、里子さんは主人と古くからのお知り合いなんですよってね。
理恵 はい。母も驚いておりました。もう帰ってくるなり大騒ぎでしたの。
晴子 そうだわ。ちよつと失礼しますね。

◀晴子、急に立ち上がって上手へ。健一、晴子を目で追いながら、

健一 どうしたんだ、いきなり。

晴子 ええ、ちよつと。

健一 (理恵に) すみません。何だか家内も浮かれているようで。ここに来てから調子がいいようなんですよ。さ、どうぞ。(と、ビールをすすめる)

理恵 いいえ、もうこれ以上は。こんなに日が高いうちからいただきましては、

健一 そうですか。いや、無理にすすめると里子さんに叱られますからね。でも、遠慮しないで下さいよ。

理恵 はい。ありがとうございます。あのう、高山さんは、母とはいつ頃からのお知り合いなんでしょうか。

健一 学生時代です。わたしが二年で、里子さんが四年生でした。大学は違っていたんですが、今で言うサークルつてやつですかね、サルトルの研究会で一緒だったんですよ。

理恵 えつ、母がサルトルの、ですか？ とても信じられません。

健一 里子さんは研究会のマドンナだったんですよ。みんなの憧れの的でね、この私もその一人だったんですよ。

理恵 母はなぜですか、学生時代の話はあまりしたがりません。私が大学へ進みます時も、ずいぶん反対したんですよ。

健一 ほう・・・(と思案顔) お父さんは何とおっしゃってたんですか？

理恵 ご存知なかったんでしようか、母は結婚いたしておりません。

健一 結婚なさってない・・・うーん・・・そうですか・・・そういえば、里子さんもあなたも館山
つておっしゃってましたね。勘弁して下さいよ、鈍くて。

理恵 いいえ、慣れてますからお気になさらないで下さい。それに私、幸いにも世間によくあるよう
な、片親という事で引け目を感じたり、人様から後ろ指を指されたりするようなこともあり
ませんでしたから。

健一 そうですか、それを聞いて安心しました。失礼を承知で伺いますが、あなたがそのようにお育
ちになったのは、里子さんの教育ですか？

理恵 それも確かにありますが、やはり大叔父のお陰だと思います。この近在では人望のある人でし
たし、苗字も同じでしたから。

健一 あなたはこの町でお生まれになったんですか？
理恵 ええ。

健一 失礼ついでにもう一つ伺ってもいいですか？

理恵 (笑って) 私の、年齢でしようか？
健一 (大笑いして) そういうところは、里子さんの若い時にそっくりだ。勘の鋭いところは特にね。
お差し支えなければ、

理恵 十二月で三十六になります。

健一 そうですか・・・なるほど。

理恵 母は大学を卒業してすぐ、私を出産するためにここへ来たのです。

健一 これで、里子さんが突然いなくなったわけがわかりました……。

◀少しの間があつて、

理恵 私もお尋ねしてよろしいですか？

健一 ええ、どうぞ。

理恵 高山さんは、私の父……と思われる方をご存知なのではありませんか？

健一 えっ、里子さんからお聞きになってないんですか？

理恵 はい、何も……。

健一 実は僕も今、それを考えていたところなんです。

◀上手より、晴子が笑顔で戻ってくるのに気がついて、健一と理恵は一瞬沈黙する。

晴子 何のお話？ 私にも聞かせて下さいな。(と座る)

健一 どこに消えていたんだい。

晴子 さあ、どこでしょう。さ、理恵さん、もう安心して召し上がって下さいな。(とビールをすすめる)

健一 そうか、里子さんに電話したんだね。

晴子 ええ。里子さんもいらっしやることになったの。

理恵 まあ、どうしましょう。わたしが長居したばかりに、お二人のせつかくのご休暇をお邪魔し

てしまつて……。

健一 いいじゃありませんか。どうです、夕飯も一緒にして下さると尚うれいんですがね。(晴子に) どうだろう。

晴子 はい、そうすることに決まりました。

理恵 いえ、そこまでご迷惑をおかけするわけには……。

晴子 いいえ、迷惑なんてちつとも。(健一に) 里子さんが山菜を持って来てくださるそうよ。

健一 そいつはありがたい。

理恵 私、ちよつと母を手伝ってきます。

晴子 (立とうとする理恵を手で押しとどめ) 大丈夫。ご飯はもう仕掛けましたし、イカとアジがあまりすすつてお話ししたら、こちらでお刺身にして下さるつて。お母さんには申し訳ないけど、お食事会、今日にしていたのよ。

理恵 何かお手伝いできることはありませんか？ 何だか私、落ち着かなくて、

健一 まあ、いいじゃないですか、今日ぐらいはゆつくりなさつたらいい。

晴子 一番喜んでるのはあなたみたいね。

健一 えつ？

晴子 主人が今みたいにな、えつ？ つて言うときは、そうだつて言つてるのと同じなんですよ、ね、あなた？

健一 今日はそうだつてことにしておこう。

理恵 まあ、(と笑う)

健一 おかしいですか。おかしいでしょうね。

晴子 何だか楽しくなりそうだわ。さ、理恵さん、(どビールをすすめる)

理恵 ありがとうございます。母も間もなく参ることでしょうから、一緒にいただきます。

晴子 そうですか。それじゃ、無理にはおすすめしないわね。でも、ご遠慮なさないでね。

理恵 はい。(どクスクス笑う)

晴子 あら、私何かおかしいなと言ったかしら？

理恵 いいえ。高山さんも、さつき同じことをおっしゃったものですから。

健一 言わなきゃいなくて思った矢先に、言っちゃったんだよ、君が。

晴子 だって私、そんなこと知りませんもの。ね、理恵さん？

理恵 ええ。でも、仲のよろしい証拠ですわ。母と私じゃ、こんなふうにお酒をいただくなんてことはありせんから、とても羨ましいですわ。

晴子 (意識的に) お父様とは、いかがですか？

健一 えーと、君、

理恵 (思わず吹き出して) 高山さん、私のことでしたら、先ほども申しましたように、どうぞお気遣いなく。(晴子に) 私、父親はおりません。母が結婚しなかったものですから。

健一 僕がさつき聞いたばかりなんだよ。

晴子 (健一に) まあ、そうだったの・・・(理恵に) ごめんなさいね、またやっちゃった。お聞きしたいことがいっぱいあるのに、なんとかしてちょうだいッ。

理恵 まあ、どうしましょう。

健一 君、無茶なこと言うなよ。理恵さんが困ってるじゃないか。

理恵 いいえ、ちっとも。私、こんなに笑ったの久しぶり。

◀上手から、里子が大きなお盆を持って現れる。

里子 ごめんください。また、こんなところから失礼いたします。

◀理恵、さっと立ち上がり、お盆を受け取らに行く。晴子も立ち、

晴子 お待ちしておりました。ご無理をお願いしまして。

里子 いいえ、かえって理恵がお邪魔したためにご迷惑をおかけしまして。

◀里子、理恵にお盆を渡すと、テーブルのところへ来る。健一、立って里子を迎える。

健一 いやあ、思わぬ宴になって、僕は喜んでおります。

里子 お招きありがとうございます。奥様のお言葉に甘えてやって参りました。

健一 イワシ、うまかったですよ。

里子 まあ、よかった。

◀理恵、テーブルに器を並べている。里子、それを見て、

里子 これとって珍しいものじゃありませんが、

晴子 まあ、おいしそう。

里子 ここで採れたものと思わせて。

晴子 ありがとうございます。里子さん、どうぞこちらへ。(と上手側の椅子をすすめる)

里子 はい。でも、お外でいいんですか？

晴子 それが不思議なくらい、いい気分なんです。

里子 それならいいのですが、(と椅子に掛けようとして)そうでしたイカとアジを先にいたしましょうか？

晴子 あ、いけない、忘れるところでしたわ。

理恵 私がいたします。冷蔵庫の中ですか？

里子 そうね。奥様、理恵にまかせましょ。

晴子 (理恵に) いいんですか？

理恵 ええ。

晴子 じゃ、すぐ出します。あなた、里子さんのお相手、お願いしますね。

健一 うん。(理恵に) すみませんね。

理恵 いいえ。

◀晴子と理恵、上手に去る。里子、座る。健一は正面上手側の椅子に移り、里子にコップを渡すと、

健一 さ、どうぞ。(とビールを注ぐ)

里子 恐れ入ります。

◀健一、自分のコップに注ごうとすると、里子が健一から缶をとり、注ぐ。

里子 どうぞ。

健一 里子さんに注いでもらうのは、三十六年振りのことですね。

里子 そんなになりますか。

健一 ええ……。それでは、

里子 はい。ちようだいいたします。

◀二人、ビールを飲む。

健一 さつき、理恵さんからお聞きしましたが、ご結婚なさっていないとか。

里子 まあ、そんなことまで。

健一 何となく、そんな話になりましたね。理恵さんは……。僕の知ってる人じゃないかと思ったらしい。

里子 私の一存で決めたことですから、理恵には何も話しておりませんの。

健一 そうですか……。理恵さんは今年の十二月で三十六歳になられるそうですが。

里子 ええ……。高山さん、あなたがお考えになっていらっしやるようなことはございません。

健一 相変わらずですね。理恵さんもあなたに似てとても感が鋭いですよ。

里子 女は、みんなそうですのよ……。奥様もきつと。

健一 なねほどね……。研究会のメンバーじゃないとおっしゃるんですね。

里子 高山さん、お子さんは？

健一 おりません。
里子 そうですか。

◀しばしの間。

健一 しかし、里子さんもよく決心されましたね。それに藤田先輩も、また見事に口を閉ざしたもんです。
里子 たぶん、館山家の血筋でしょうね。藤田の家には、父の妹が嫁いでいますね、陽介さんはその息子なんです。父や叔母からもきつく口止めされていたんだと思います。もちろん、ここの叔父からも。
健一 ずいぶん結束の固い家柄なんですね。

里子 そうですね、ある意味では厳しい家系です。その本家がこの館山家です。

健一 いろいろ大変だったでしょう。

里子 いいえ、そうでもありませんでした。

健一 ほう、なぜですか。

里子 (毅然として) 私が自分の意思でしたことだからです。筋が通っていて、本人が責任をとれば善しとされた家でした。

健一 なるほど、その方がむしろ厳しいですね。世間体を考えて、ということとはなかったんですか？

里子 高山さんは、白隠禅師をご存知かと思いますが、

健一 白隠禅師・・・臨濟宗の白隠ですか？

里子 そうです。

健一 いろいろ逸話のある名僧だという程度ですが。

里子 私は父に、事のいきさつを正直に話しました。最後まで黙って聞いていた父は、おまえはそれでいいんだなと念を押してから、こう言ったんです。江戸時代に白隠禪師という立派な禅僧がいたんだが、有名な逸話がある。おまえのような娘の話だが、知っているかと・・・ご存知ですか？

健一 ええ、その話は・・・それで？

里子 私は知りませんでした。父は、知りたければ自分で調べろ、叔父のところへ行き、親父が白隠禪師になつてくれと言っている、そう頼んでこい、それだけ言えばいい、と。

健一 調べたんですか？

里子 いいえ、どんな話かわかったら行けなくなります。叔父にもそのように言いました。

健一 それで叔父さんはなんっておっしゃったんです？

里子 愚問です。その逸話をご存知なら、私がここにこうして居ることでよくわかりただける筈ですが。

健一 ただ、そうかとおっしゃっただけ・・・ということになりますね。

里子 (健一をじつと見て) 高山さん、あなたはどうですか？

健一 ……僕に白隠禪師になれとおっしゃるんですか？

里子 はい。(と笑う)

健一 (大声で笑い) わかりました。実は、あの夜のことなんですが・・・僕は、歓送会で飲み過ぎて、確か別室で寝かされていたんですが、その時あなたも、

里子 私には関係のないことです。

健一 覚えてないとおっしゃるんですか？ それとも、あの夜のごは僕の勝手な空想にすぎないとおっしゃるんですか？

里子 あなたはたった今、白隠禪師になるとおっしゃったばかりです。

健一 (一瞬、言葉に詰まるが) もう一つお聞きしたいことがあるんです。僕はあの頃、藤田先輩と里子さんが恋人同士だと思っていたんですが、それはどうなんですか？

里子 陽介さんは、父から頼まれて、まあ言ってみれば私の護衛のような役をしていたのです。

健一 悪い虫がつかないようですか？

里子 それもあったのですが、六十年安保を控えて学内も荒れていましたから、父としてはむしろ思想的な面を考えてのことだったようです。

健一 そうでした・・・あの頃は、まだ思想の力が信じられていた時代でしたね。

里子 テレビで、デモのニュースを見るたびに、(と、思わず健一を見た自分に気づき、慌てて目をそらし) 父は、私の顔を探していたようです。そんなわけで、陽介さんは護衛役を真面目に勤めていてくれただけです。

◀ 健一、里子が一瞬動揺したわけを問いただそうとするが、思いとどまって、

健一 それにしても、どうして、今日僕を尋ねて下さったんですか？ その気になれば、会わずに済ませることだって出来たはずですが。

里子 私はすべてお話したつもりです。

健一 解釈は自由ということですね。

里子 私には関係のないことです。

健一 館山家は臨済宗ですか？

里子 はい。

健一 藤田先輩の家ですか？

里子 宗派は違いますが、禅宗です。それが何か？

健一 いえ、何でもありません。館山家の家系は禅問答がお好きなようですから、ちよつとお聞きしたままで。さあ、どうぞ。(ビールを注ぎながら) そういえば、里子さんは学生時代から酒豪でしたよね。

◀ 晴子、上手より、刺身と冷酒をのせたお盆を持ってやって来ながら、

晴子 お待ちどうさま、聞こえましたよ、どなたが酒豪でいらつしやるんですか？

里子 まあ、すみません。私だけ何もしないで。

晴子 私もそうなんですのよ。理恵さんのさばき振りを見ていただけなんです。はい、アジのたたき。(とテーブルに置く)

健一 ほう、これはまたうまそうだッ。(とすぐ食べる)

晴子 あなた、理恵さんの包丁さばきは、そりゃあ見事なもんですのよ。いかが？

健一 うん、実にうまいッ。

里子 まあ、よかった。

晴子 もうすぐイカ刺しもできあがりますからね。私、あの薄皮をはぐのが苦手なんですのよ。さすがに理恵さんはお上手ですわ。

◀ 里子、上手に去ろうとする晴子に慌てて声をかける。

里子 あ、奥様、あとはもう理恵にお任せください。あの子は慣れておりますから。私、そうしていただくないと、何か落着かなくて困ります。

晴子 (テーブルに戻り) すみません、気がつかなくて。主人、退屈でしたか？

健一 失敬な、僕はちゃんと、ね、里子さん？

里子 はい、それはもう。

晴子 じゃあ、もう少しお願いしますね。(里子に) すぐ戻りますから。

◀晴子、につこり笑って上手に去る。

健一 あれでも気を使っているつもりですから、どうか言うとおりにしてやって下さい。

里子 はい、ですから尚更のこと……言わないつもりでおりましたが、先ほど、こちらへ伺う前に陽介さんから電話がありました。

健一 やっぱり、ありましたか……先輩は何て言っていましたか。

里子 夏子さんは、奥様のご親友だそうですね。

健一 ええ。家内は、僕には学生時代に好きな人がいたらしいと、夏子さんから聞いていたようです。

里子 それもあって、陽介さんは奥様に……断り切れなかったそうです。

健一 何をでしょうか？

里子 質問やお願いなど、いくつかあったようですが……。

健一 そうだったんですか……家内は、あなたがここの経営者だと知っていながら、僕には黙っていました

たからね・・・療養先はいくらでもあるのに、わざわざここを紹介してくれた先輩の真意も計りかねていたんです、

里子 陽介さんは、晴子さんの何か思い詰めた様子が気になるからと心配して・・・それから、ここでの療養の件を、あなたが担当医と相談なさってないんじゃないかと・・・どうなんですか？

健一 療養先については話してあったですが・・・実は昨日、病院から電話がありましたね、ここへ来る前に担当の医師に会って来てたんです。

里子 そうでしたか、よかった。で、お医者さまはなんて・・・。

健一 肺に転移したようです、と・・・五年持てばいい方なんだそうです。術後の経過は今のところ予想以上にいいと言ってくれましたが・・・僕としてはあと二、三年もつてくれれば、と思っっているんです。

里子 そのこと、奥様も、

健一 いえ・・・。

里子 (ホツとして) そうですか・・・奥様には私のこと、お話になったんですか？

健一 ええ。

里子 いつですか？

健一 今日です。理恵さんがいらっしやる前に、ここで・・・。

里子 何ておっしゃいました？

健一 片思いだったと・・・どうしてそんなことお聞きになるんですか。

里子 私の口からはこれ以上申し上げられません。どうしてもお知りになりたければ、陽介さんにお尋ね下さい。

◀上手より晴子と理恵、お盆を持って楽しそうにやって来る。健一と里子、その足音を聞きつけ、顔を見合わせると、その場を取り繕って、

里子 まあ奥様、かえってお手数をおかけして、すみません。

晴子 (笑顔で) いいえ、お待たせしました。はい、イカ刺しですよ。(と、テーブルに並べる)

理恵 すみませーん、遅くなりました。

健一 (理恵に) ごくろうさまでした。いやいや、お疲れさまでした。

◀健一、立ち上がると、理恵を下手の椅子に、晴子を正面下手側の椅子にそれぞれ座らせると、自分は晴子の隣に籍を移し、

健一 日本酒がいいかな。

◀健一、お盆の上にあつた盃に酒を注ぐと、他の三人に配る。

晴子 あなた、改めて乾杯しません？

健一 そうだね、今度は何に乾杯しようか。

晴子 それはもう、あなたと里子さんの三十六年振りの再会に決まってるわよ。

健一 (里子に) いいですか？

里子 はい、それはおまけということで、やはり奥様のご退院を祝して、乾杯を。

理恵 賛成！

健一 それでは・・・今日は特別な一日になったようです・・・（続けて何か言おうとするが思いとどまって）君の退院と里子さんとの再会を祝して、
全員 かんぱーいッ。

◀ 四人、それぞれに盃を合わせる。

晴子 ああ、おいしいッ。

健一 あ、君ッ、大丈夫なのか、お酒、飲んだりして、

晴子 注いだのは誰でしょう、か？

健一 ごめんごめん、すっかり忘れちゃって・・・。

晴子 でも、今日は特別な一日だから。（と笑う）

健一 じゃ、それだけだよ。

里子 そうですわ、お体に障りますと・・・。

晴子 はい。でも、空の盃じゃ寂しいから、もう一杯だけ注いでおいて下さいな。

健一 ほんとに注ぐだけだよ。（と注ぎ、場を盛り上げるように）さあ、理恵さんが腕をふるってくれた刺身をいただきますよか。

◀ 全員、刺身を食べる。

健一 これはいけるッ。

晴子 おいしいッ。(里子に) 今日は何だかおいしいって、そればかり言ってるような気がしますわ。

里子 それはようございました。喜んでいただいて良かったわね、理恵。

理恵 ええ。

里子 わたしたちもベランダでいたくなくて、本当に久しぶりですよ。

晴子 そうですか。私、これから毎日お昼はここでいたどころかしら。

里子 ええ、そうなさるといいですわ。山側から吹いてくる風が、とても爽やかなんですよ。

理恵 お母さん、

里子 はい？

理恵 高山さんにお聞きしたんですけど、高山さんとはサルトルの研究会で一緒だったんですって？

里子 えっ、(と健一を見る)

健一 (笑って) 研究会のマドンナだったこともね。

晴子 まあ、そうでしたの。主人から皆さんの憧れの的でいらっしやっただとお聞きしていましたが、理恵さん、あの当時はね、一番人気のあるきれいな方がマドンナって言われてたのよ。

理恵 でもおばさま、母は私を産むことよって初めてマドンナになることができたんだと思いますわよ。

晴子 あら、どうして？

里子 理恵、(とたしなめる)

理恵 (かまわず) マドンナというのは聖母マリアの称号ですから。それに、

里子 (静かに) 理恵さん、場所柄をわきまえない。

理恵 母はいつもこうなんです。わたしが父親のことを聞いたり、話したりするのを嫌がるんです。お母さ

んお願い、今日は話させて。いいでしょ？

健一 里子さん、いいじゃないですか。理恵さんはあなたを困らせるようなことを言うような人じゃない。

里子 ええ。それはよくわかっておりますが、

晴子 里子さん、私、里さんも理恵さんも他人のようにには思えないんです。こんなこと申し上げるのは差し出がましいんですが・・・私、理恵さんの気持ちが痛いほどよくわかるんです。元はと言えば、

里子 (晴子の言葉をさえぎって) いいえ、お気持ちにはわかっておりますから、もうそれ以上は、どうぞ・・・。
叔父が亡くなります四、五日前でしょうか。私を枕元に呼びまして、館山の家系からは、ときどきお前のような人間が出る、その人たちは大仕事をして財を成したが、お前はどうか、と申しました。私は、したと答えました。まだ使い切れない程だと言いましたら、お前のは大博打だ、しようがない奴だと言って、笑っております。私は大博打を承知で打ったのです。打たなければ、一生後悔するとわかっていたからです。

健一 理恵さん、あなたの気が済むまで話したらいい。こういう機会は滅多にないですよ。

理恵 はい・・・でも、私が知りたかったことは、今、母が話してくれました・・・私、この歳になって、やっと乳離れできたような気がします。ですから、もういいんです。

里子 いいのよ理恵、話しても。

理恵 ありがとう、お母さん。なんだか急にすっきりしたの。

晴子 理恵さん、本当にいいの？ 後悔なさらない？

理恵 はい、おばさま。これまで父親がどこの誰なのか、それだけはどうしても知りたいと思っていたんですけど、なぜか急にふっ切れたんです。

健一 ほう、それはまた不思議だね。

理恵 正直言つて、今日こそは何があつてもと決心して、機会を伺っていたんですよ。

晴子 ごめんなさい、私まだよくわからないの。そんなに気になっていたことがなぜふっ切れたの？

理恵 さあ・・・たぶん母が動じなかったからでしょうね。

里子 理恵には、そう見えただけよ。

健一 いや、それは僕も感じましたよ。

理恵 私は、母が自分を殺して生きて来たんじゃないかと思つてました。でも、今の母の話で、そうじゃないことがわかつたんです。それだけでもう充分です。お母さんよかつたわね、すてきな恋ができて。誰が恋だと言いました。私は自分で自分の人生を決めたと言っただけです。

晴子 同じことじゃありませんか。

◀健一と理恵、ドつと笑う。それにつられて里子と晴子も笑い、和やかな雰囲気になる。が、里子はすぐに笑い止むと、晴子と理恵の二人に気づかれないように、責めるような眼差しで健一を睨む。
健一、里子の心情を察して話題を変える。

健一 ところで理恵さん、

理恵 はい？

健一 実は今日里子さんにお会いした時、他の人と間違えちゃったんですよ。

晴子 あなた、なんですか急に。

理恵 母はそんなに変わっていましたか。

晴子 そうじゃないんですよ。

里子 ひよっとして、(胸の前で小さく手を振り) これ、のことですか？

健一 ええ、それです。

里子 そうだったんですか。実は私も、気になっていたんです。

理恵 あら、知らないのはどうやら私だけみたい。

健一 いえね、三時頃、家内と二人で浜の方を眺めていたんですが、その時、

理恵 あっ、それ、私です。手を振ったんでしょう？ 私が振ったんです。

◀健一と晴子、同時に「えッ」と驚いて、

晴子 理恵さんだったの。よかったわア、半分当たってて。

健一 半分って言い方はないだろう。

◀四人、それぞれ顔を見合わせて笑う。

理恵 私、あの時、誰かに見られているような気がしたんです。なんとなく振り返って見たら、お二人がい
らっしゃったんです。

晴子 まあ、

理恵 振り返った時私、両親に見守られて、砂浜で遊んでいる子供になったような気がして、つい手を振
ってしまったんです。そうしたら、振り返して下さって・・・あれは高山さんだったんでしょう？

健一 (一瞬戸惑うが) ええ。

理恵 あの後、浜へ降りていらっしやるのかなと思って、少し待ってたんですよ。
健一 ほら、いるんだよ、こういう人が。

◀電話のベルの音が聞こえてくる。

晴子 ちょっと失礼します。(晴子、上手に去る)

理恵 こういう人って、なんですか？

健一 あの時、僕たちも理恵さんと同じようなことを話してたんですよ。手を振ったのはいいんだけど、人違いの上に、もし、尋ねて来られたらどうしようってね。

里子 それであんなに驚いていらっしやったんですか？

健一 ええ。

理恵 他のことも、こういう具合にすんなり解決しないものかしら。

健一 まだ今日のことだからですよ。時がたつてしまうとそう簡単にはいかないもんです。記憶というものは、時間の流れとともに少しずつ変わっていくものなんでしょうね。

里子 変わらない記憶もありますわ。

◀里子、椅子から立ち上がると、浜の方を眺め、

里子 そろそろ満潮になるのかしら。風が重くなってきたわ。

◀そこへ晴子が上手より戻って来て、

晴子 あなた、社会部の田村さんからです。

健一 田村君？ 何だって？

晴子 いらっしゃるんですたら、直接お話したいとおっしゃってますけど、

健一 そう。何だろう。(里子に) ちょっと失礼しますよ。

◀健一、上手に去る。晴子が里子の上手に並び立つと、里子は浜の方を眺めたまま、

里子 砂浜の右手・・・あの岬を回ったところにも、港があるんですよ。

晴子 昨日、あの砂浜を主人と一緒に散歩したんですの。

里子 まあ、そうでしたか。

晴子 結婚する前にも一度だけ、主人と砂浜を歩いたことがあるんですよ。

◀理恵、椅子から立ち上がると、晴子の上手に行きながら、

理恵 たった一度だけですか？

晴子 ええ。その時主人は、砂浜についた足跡を見ながら、私に言いました。この足跡がどこまでも続いて行くといい、そしてふと気がついたら、小さな足跡が混じっている、それを見にまた砂浜に来ようって・・・私、見たかったな・・・。

◀ 里子と理恵、それぞれの複雑な思いの裡に聞いていたが、

理恵 高山さんって、見かけによらず、キザなんですね。

晴子 (笑って) 理恵さんもそう思う？

◀ 里子もつられて小さく笑う。そこへ健一が沈痛な面持ちで戻って来る。晴子、その気配に振り返り、健一を見て、

晴子 あなた、どうしたんですか？

健一 うん・・・(倒れこむように椅子に座ると) 梶山君が、亡くなったそうだ・・・。

晴子 えっ、マニラ支局の梶山さんですか？

健一 うん・・・。

◀ 健一、焦点の定まらない眼で静かに正面を見たままじつとしている。

里子と理恵、顔を見合わせる。理恵、小さくうなづく。

里子 奥様、私たちはこれで失礼させていただきます。

晴子 えっ、でもまだお話が、

里子 高山さんのこのご様子では。

健一 いやいや、僕は大丈夫ですから……。

里子 お話の続きは明日にでも……。

晴子 わざわざお呼びしておきながら、申し訳ありません。

理恵 この次のお食事は家でいたしましたしよ、ね、お母さん？

里子 そうね。(晴子に) 奥様もそろそろ中へお入りになられた方が……。

晴子 はい。ありがとうございます。(健一に) あなた、

◀健一、晴子を見る。里子、健一の前に行き、

里子 どうぞ、あまりお気落ちなさらないように……。 (意を含んだ眼差しで) 今日のところはこれで失礼させていただきます。

◀健一、立とうとする。

里子 どうぞ、そのままです。

健一 どうも……すみません。

里子 奥様、それではごめん下さいませ。(と、一礼して) 理恵、

理恵 はい。(テーブルを見て、晴子に) こちらは後で私が片付けに参りますから。

晴子 いいえ、それは私が、

里子 奥様、どうぞ理恵にお任せください。

健一 すみませんね・・・(悄然として) また・・・。

◀ 里子と理恵、下手に去る。晴子、健一の隣に座り、

晴子 あなた、大丈夫ですか？

健一・・・。(うなづく)

晴子 事故ですか？

健一・・・クモ膜下出血だそうだ。インドネシアの取材から帰った直後だったらしい・・・来年には本社に戻る事になっていたんだが・・・。

晴子 マニラには行かなくていいんですか？

健一 うん、支局の連中がやってくれる。むこうで茶毘にふして・・・お骨がこっちに帰って来てから、社葬になるだろう。どんな仕事をしてくれるか、楽しみにしてたんだがね・・・。

晴子 あなたには、息子のような人でしたものね。

健一・・・(うなづく)

◀ 健一と晴子、それぞれの思いに沈んでいる。やや間が合って)

晴子 私、なぜ子供を産まなかったのかしら・・・私に勇気がなかったばかりに・・・あなたには申し訳ないと思つてます。

健一 何を言ってるんだ、君が悪いわけじゃない。

晴子 あなた、もし間違っていたらごめんなさい。ひよつとしたら……

◀晴子、その先を言いよどむ。健一、晴子が何を聞きたがっているのか承知しながらも、努めて平静に、

健一 ひよつとして、何だい？

晴子 ううん、なんでもない……理恵さんも、里子さんもいい人たちだわ。ここに来てよかったわね。

◀晴子、健一を見てニコツと笑うと席を立ち、ベランダの先へ歩いて行く。浜の方を眺めながら、

晴子 母親にもなれなかった、妻としても私は落第、今じゃ女としても……(健一を振り返り)私は何者なんでしょう？

健一 何を言ってるんだ。君は君さ、そして僕の女房だ。手を振るんじゃないぞ……僕にもだ……。

晴子 ええ……。 (とまた浜を見て) 私もまだ振りたくないわ……。

健一 君はよくやってきたよ……十年もつかどうかって言われてた君が、三十年頑張ってきた。それだけでも立派だよ。

◀晴子、健一のところへ戻りながら、

晴子 そう言ってくれるのはあなただけ。母は亡くなる前に、あなたは女として一人前とは言えないのに、

健一さんにはほんとに感謝していますよ、って。いくら母親だからって、言いにくいことをよくもハッキリ言ってくれたものだと思っただけ、ほんとのことだから仕方ないわね・・・今じゃお乳まで一っしかないんですから、踏んだり蹴ったりね、あなた。

健一・・・（晴子を見つめている）

晴子（明るく）何か言っつてよ、私の立場がないじゃない。

健一 うん。

晴子 うん、じゃないわよ。

健一 いやね、君が僕を救ってくれたんだなって、そう思ってたんだ・・・。

晴子 私が？ とんでもない。あなたの足を引つ張りどおしだったわ。私というお荷物さえなきや、あなたはジャーナリストとしてもっと活躍できたはずよ。

健一 それはどうかな。梶山君のように早死にしてたかもしれない。仕事で成功することと、長生きすることと、人間にとつて大切なのはどっちなんだろうね。もちろん、両方とも実現させている人だつて大勢いるんだが・・・。

晴子 私はその日その日を元気で暮らせたなら、それだけでも幸せなんだけど。

健一 そうか・・・君にとつては、健康で毎日を送ることが大仕事だったからね。

晴子 大仕事？（ふふ、と笑つて）そう言われると、なんだか褒められたような気がするわ。

健一 まだまだこれからが大変だぞ。

晴子 ええ・・・生きることが、私の仕事なのね・・・。

健一 そうさ・・・それが一番難しいことなんだろうが、すべてがそこにつながる。仕事も、死ぬという事も・・・。

晴子 これから私たち、どうしましょうね。

健一 生きていくさ、今まで通り。うまく死ぬことができるように、頑張って生きていくさ。

晴子 あなた、

健一 うん？

晴子 手伝ってね。

健一 ああ。

晴子 生きること、死ぬこともよ。

健一 うん。

晴子 ねえ・・・明日また、砂浜を歩きましょうよ。

健一 うん。

◀松風のそよぎに重なるように、波の音が聞こえてくる。晴子と健一、しばらくその音に耳を傾けているが、どちらからともなく立ち上がる。ゆっくり歩きながら居間に戻ると、奥の扉から寝室に消えて行く。

第二場、終わり。

●第三場（転換場面） Ⅱ第二場から二年後の貸別荘。晴子の三回忌の法要をおこなった六月初旬の夜。

◀上手（台所）からエプロンをした理恵が、お盆を持って出てくる。ベランダに来るとテーブルの食器をいかにも手慣れた様子で片付け、台所に戻って行く。再び上手から出てくるとサンシートを下の舞台袖（庭の物置）に片づける。それが終わり、下手から出てくると、居間に差しかけた辺りで寝室の方に声をかける。

理恵 おじさまア？

健一 （明るい屈託のない声で）ホーイツ！

理恵 テーブル、台所に戻しちゃっていいんですかア？

健一 ホーイツ、すまないねエ。

理恵 いいえエ。

健一 ベランダのテーブル、明日届くと言ってたよねエ？

理恵 ええエ。

◀一場と同じ音楽が小さく流れてくる。理恵が最初に椅子を、それからテーブルを台所へ運び終わる。と同時に音楽が次第に大きくなり、穏やかな波の音が聞こえてくる。

第三場、終わり。

●第四場Ⅱ第一場と同じ砂浜。転換場面の翌日の午後。

◀ 転換場面から流れていた音楽が次第に小さくなり、波の音だけが聞こえている。しばらくするとそれもまったく聞こえなくなる。

(黙劇)

○上手から、第一場と同じ服装をした晴子が、満ち足りた微笑を浮かべながら、耳を澄ますようにして、波打ち際をゆっくり歩いてくる。

○しばらくして、やはり下手からズボンの裾をまくり、スニーカーを履いた健一が、のんびりとした様子で砂浜を歩いてくる。

○晴子、舞台の下手近くまで来たところで踵を返すと、自分の足跡を確かめるようにしながら、そのまま再び舞台奥に歩いて行く。

○健一は晴子とすれ違ったその瞬間、何かの気配を感じたように振り返り、晴子が下手に消え去るまでその後ろ姿を見送っている。

○健一、思いついたように、今し方歩いて来た自分の足跡を辿りはじめるが、二、三步辿ったところでふと我に返る。

◀ と同時に波の音が聞こえてくる。健一は再びのんびりと舞台中ほどまで戻って来る。海の沖合に視線を向け、そのまま砂浜に腰を下ろす。

○晴子、舞台奥に置かれた一段高い台の上に立つ。

◀ ややあつて、下手から日傘をさした理恵が、白い船員帽を背後に隠しもつてやってくる。健一の傍らまで歩いて来て、

理恵 今日もいい天気！

健一 (沖を見たまま) 蒸し暑いねえ。梅雨入りしたなんて信じられないよ。

理恵 今年は空梅雨なのかしら。おじさま、さつきテーブルが届いたわ。ちょうどいい大きさね。

健一 (嬉しそうに) あ、そオ。

理恵 もう、台所から持ってこなくてもいいわね。

健一 うん。理恵さんにも迷惑をかけなくて済むよ。(と言いながら立ち上がると、理恵の日傘を見て驚く) ほう、もう日傘かい？

理恵 ええ、この季節の日差しが一番紫外線が強いんですって。

健一 僕も帽子を持ってくるんだったな。

理恵 はい。(と、隠し持っていた帽子を健一の目の前に差し出す)

健一 オツ、こりゃ、まるで手品だね。(と帽子を受け取って被り) いや、どうもありがとう。この帽子、誰の？

理恵 おじさまのよ。

健一 僕の？ (帽子を取って見る)

理恵 (笑って) 私からのプレゼント。

健一 プレゼント？ 嬉しいなあ。船員帽だね。こういうのがほしかったんだ。

理恵 気に入った？

健一 うん。(と被り、理恵を見る)

理恵 (笑って) よく似合うわ。

健一 これで僕も、この町の住人らしくなったってわけだ。

◀健一と理恵、そのまま砂浜に腰を下ろす。

理恵 (からかうように) 引っ越しもしてない人が、住人になれるんですか？

健一 そうか、それがあったねえ。

理恵 いつするんですか？

健一 里子さんが契約書に判を押してくれたら、すぐにでも思っているんだが。

理恵 お母さん、ずいぶん迷ってたわ・・・できれば手放したくなかったみたい。昨日ご返事したのは、おばさまの三回忌だということもあったんじゃないかしら。

健一 たぶんそうだろうね。僕は半ばあきらめていたんだ。去年もあっさり断られていたしね。

理恵 それがあっさりでもなかったんですよ。おじさまが帰った後で、来年定年をお迎えのはずだから、きつとまたおっしゃるんでしょうねって、溜め息ついてましたから。

健一 そう・・・実はね、あの時、僕はもう退職してたんだよ。

理恵 えっ、先月の誕生日で、定年だったんじゃないんですか？

健一 うん・・・定年まで待てなくてね。

理恵 一つお辞めになったの？

健一 おとし。

理恵 一昨年？ おばさまが亡くなられたからですか？

健一 まあ、同じようなもんかな・・・梶山君が死んだ時のこと、覚えてるかい？

理恵 ええ、よく覚えてるわ。だってあの時のおじさまの落ち込みようだったもの。

健一 梶山君が死んだという知らせを、なぜか僕は、晴子の死と重ねて聞いていたんだ・・・それなのに妙に冷静でね。何て言うのかな・・・いろんなことがいちどきに思い出されてね。しかも時間や感情の流れに何の脈絡もないんだ。時間にめまいを起こしたようにね。それを景色でも眺めているように、ただ黙って受け止めていたような、そんな気がするんだよ。

理恵 めまいですか？ わかるような気もしますが、でもなんだか変・・・。

健一 うん・・・梶山君の告別式の日には奥さんの後ろ姿を見てね、ああ、これだったんだなって気がついたんだ。僕はあの時も、晴子の死を受け入れていたんだなって・・・。その日のうちに、残っていた有給休暇の申請書と一緒に、退職願いも出しちゃったんだ・・・。少しでも長く晴子のそばにいてやりたいと思ってるね。いや、そうじゃないな・・・。晴子と別れるための心の準備と言ったらいいのかな、それが僕には必要だったんだ。

理恵 おばさまは、退職されたこと、ご存じだったんですか？

健一 いや、まさかあんなに早いとは思ってなかったから。

理恵 だから去年はあんなに長くいらっしやっただのね。母はずいぶん心配してたんですよ・・・おばさまが亡くなって、仕事に身がいらなくなったのか、それとも定年前だから閑職に回されておしまいにな

ったのか、どっちなんでしょうねって。

健一 そう・・・つい、言いそびれちゃって、ハハハ、

理恵 ハハハ、じゃありません。

健一 いや、申し訳ない。

理恵 母が知ったら、きつと怒ります。

健一 それは困ったな。なんて言えばいいんだろうね。

理恵 私は知りません。

健一 そういうところ、里子さんに似てるね。

理恵 似てません。

健一 まあ、そういうことにしておこう。やはり正直に話すしかないかな。

理恵 (日傘をたたみながら) 中通りの売家はご覧になったんですか？ 向こうの方が漁港や郵便局が近く

て何かと便利でしたのに・・・。

健一 見るには見たんだけどねえ、やっぱ僕は、あのベランダからの眺めが気に入ってるんだよ。それに

あつちは、海が近いといっても砂浜じゃないからね。

理恵 おばさま、あのベランダでお昼を召し上がるの、お好きでしたわね・・・。

健一 うん・・・。それも六月に入るまでだったかな。ベッドの上に起き上がるのがやっとなって状態だったから。

理恵 梅雨に入ったせいもあつたんじゃないかしら・・・あの年はよく降ったもの。

健一 よく降ったねえ。たまに晴れると、かならず砂浜を歩きたいって言ってた・・・。

理恵 私、今でもきつと歩いていらっしやると思うの・・・おばさまは素敵な方だったわ・・・私の夢の中

健一　をさつと通り過ぎて行かれたような、そんな感じが今でもするの。
そう・・・夢の中をねえ・・・。

◀健一、左手いっぱい砂を掴むと、目の高さまで持ち上げ、砂時計のように少しずつ砂を落す。それを理恵はじつと見ている。砂が落ち切ってしまうと、その後をつなぐように砂を掴み、同じように落としながら、

理恵　おじさま、三回忌も終わったことですし、そろそろいいんじゃないやありません？

健一　いいって、何が？

理恵　（砂を落すのを止めて）おわかりのはずですが・・・。

健一　・・・理恵さんは、どう思う？

理恵　ずるいわ、聞いているのは私よ。

健一　うん、それはそうなんだけどね・・・晴子はどう思ってたのかねえ・・・。

理恵　おばさまもおつもりだったんじゃないかしら。でなきや、この町にお墓をって、わざわざ遺言されるわけないもの。

健一　晴子は、いつも砂浜が見えるところに眠りたかったのかな・・・。

理恵　でもこの町にって、私にはおっしゃってました。

健一　いつ？

理恵　お食事会の時です。台所で・・・。

健一　そう・・・あのときもう、そんなこと言ってたのか・・・。

理恵 ええ。

健一 あの翌日も、ここを散歩したんだよ。晴子は、耳を澄ますようにしながら、ずっと波打ち際を歩いてた……。

理恵 おじさま……私、お食事会の席で父親のことは吹っ切れたって言いましたよね？

健一 うん。

理恵 あれには他にも理由があったんです。母もおばさまも本音を伝えたいけど、はっきり言えないし、言ってもいけない。母は自分の気持ちだけは何とか伝えたいと、ぎりぎりのところで話してるのがよくわかったわ。そのとき私、おじさまを憎んでいました。

健一 僕を……そう……。

理恵 三十六にもなつてあんなことを聞いた自分が恥ずかしくてしょうがなかったけど、それよりも憎むための父親ならもういらなくて思ったんです。それで吹っ切れたんです。今でも憎んでいるかい？

健一 (笑って) いいえ。

理恵 憎んでもいいよ……僕は、理恵さんの父親かもしれないんだ。

健一 母とそのような関係があったんですか？

理恵 と、僕は思っているんだが……。

健一 そんなにあいまいなんですか？

理恵 いや、僕の記憶ではそうだったとしか考えられないんだけどね……。

健一 母は何と言ってるんですか？

理恵 関係ないと言ってくれない……。

理恵 (一瞬、里子に嫉妬を覚えるが) 私はもう、どっちでもいいんです。むしろ、父じゃなければいいとさえ思ってるぐらい……。

健一 (意外なといった面持ちで) どうしてなんだい？

理恵 さあ……何となくそんな気がするの。

健一 (寂しそうにうつむくと、自分に言い聞かせるように) それでいいのかもしれないね……。

◀理恵、健一の言葉に物足りなさを感じて、健一から顔をそむけるように、ゆっくり下手の方を見る。そのとき砂浜を歩いて来る女性を認め、それが里子だとわかったらしく軽く手を振る。(里子の姿は見えない) それからおもむろに視線を戻すと、健一の寂しそうな顔を見る。ふと思いついて、やさしくささやく、

理恵 今夜はイワシのお刺身にしましょうね。

健一 (嬉しそうに) いいねえ。

◀理恵、そんな健一をいとおしく思い、自分でも気づかないまま、恋人にでも聞くように、

理恵 日本酒にしましょうか？

健一 (父親のように) うん。

◀理恵、こちらにやって来る里子を再び見たのち、自分が母に対して何か後ろめたいことをしている

ように思われ、その場にいたたまれなくなって、

理恵 母が来ます。私はちよつと、

◀理恵、立ち上がると、それまでとは打って変わったような冷たい視線を健一に落とし、さりげなく上手に去って行く。

◀健一、理恵の後ろ姿に目をやった後、何事もなかったように沖合を見ている。そこへ下手から里子が現れる。

◀里子は、理恵の去った上手を怪訝そうに見やりながら、健一の傍らまで歩いて来て、

里子 今の、理恵じゃありません？

健一 ええ、

里子 変な子。(波打ち際を見て) あら、ほんと。だいぶ引いてるわ。今日は大潮なんだそうですよ。

健一 大潮？ じゃ、まだ引きますか？ (と立ち上がり) 潮見表はよくごらんになるんですか？

里子 いいえ、お米屋のご主人が言ってたんです。

健一 米が大潮と関係あるんですかね。

里子 (笑って) まさか！ 釣りが好きなんですよ。大潮の日はよく釣れるんですって。(と上手を見て)

あの子、あんなところで何をしてるのかしら……。

健一 (上手を見た後、里子を見て) あっちまで行きますか？

里子 (健一の視線をさけ) いいえ、わたしはもう。

健一 じゃ、座りますか？

里子 ええ。お話したいこともありますから・・・(と、健一が座るのを待って、その隣に座り)あら、その帽子、どうなさったんですか？

健一 ああ、これ？ さつき理恵さんがくれたんです。

里子 理恵が？

健一 ええ、ちようど欲しかったんですよ、こういう帽子・・・話というのは、契約書のことですか？

里子 それもあります・・・(と一瞬ためらった後) 高山さん？

健一 はい？

里子 理恵と結婚していただけませんか？

健一 えっ！ あなた・・・自分が何を言ってるのかおわかりですか？

里子 はい、あなたが理恵をご自分の子供じゃないかと思っていらっしゃることも、承知しております。

健一 じゃ、なぜ？

里子 理恵はあなたの子供じゃないからです。

健一 例えそうだとしても、僕にそんなことできるわけないでしょうツ？

里子 高山さん、あなたがそうお考えになっただけのことです。

健一 からかっってるんですか？

里子 いいえ。

健一 理恵さんがかわいそうだとは思わないんですか。

里子 私は理恵の事を思っているからこそ、お願いしてるんです。

健一 里子さん、どこまで人の心を弄べば気が済むんですか。二年前、ベランダで、あなたがひとこと言え

ばとづくに解決していたはずだ・・・それがわかっていながら、僕も話が核心に触れるのを避けていた・・・もちろん、あなたや理恵さんが晴子を気遣ってくれていたこともわかっております。その点では感謝しています。しかしね里子さん、晴子はもう死にました。僕には子供もいない。あなたが本当のことを言っても、もう誰にも迷惑はかかりません。それなのになぜですか・・・いまさら隠したところで何の意味があるというんですか。

里子 (健一を見て微笑むと、やさしく) 白隠禅師になって下さったとばかり思っていました、健一さん、

健一 (ハツとして里子を見る) 名前を呼んでくれたのは歓送会以来ですね。

里子 ええ、あなたが学生時代から少しも変わっていらっしやらないので、つい。

健一 一瞬、僕は学生時代に戻ったような気になりましたよ。

里子 一瞬、ですか？ (と冷ややかに笑う)

健一 ええ・・・研究会に入ったころ、僕はこの世のあらゆるものは本来透き通っていて隅々まで見渡せる、またそうあるべきだと思った時期がありました。その時の心の高揚を感じたような気がして・・・人間が関与しなければ、いや、人の心というべきかな・・・今もそう思っている・・・。

里子 あなたは昔からそう・・・物事を何でもはつきりさせなきや気が済まない人でしたものね。今でもそのまま・・・でもね健一さん、世の中にははつきりさせない方がいい場合もありますのよ。

健一 それは、事によりけりです。

里子 あなたの性格というか、自分に誠実でありたいという気持ちはよくわかりますが、その一途さが周りの人を傷つけているかもしれないと、そうお考えになったことはありません？

健一 僕が人を傷つけているとおっしゃるんですか？

里子 そういうところも、昔のまま・・・じゃ、お聞きしますが、もしも、もしも仮にですよ、あのとき

健一 ベランダで、理恵はあなたの子供ですと私が言ったら、あなた、いったいどうなさるおつもりでした？
・・・(意表を突かれ、答えようとするが言葉がでない)

里子 いいえ、お答えいただけなくても結構です。あなたは どうすることも出来なかったはずですよ。

健一 (里子を睨みつけるが、何も言えないまま、うなだれる)

里子 それでいいじゃありませんか・・・今さら三十八年前のことをとやかく言ったところで、どうなるものでもありません。その間私たちは別々の人生を送ってきたんです。私があるに会う気になったのも、ようやくお互いの人生にエールを送りあえる歳になったと、そう思ったからなんです。

◀ やや間があつて、

健一 おかしなもんですね・・・僕は二年前あなたに会ってから臆病になったようだ。以前のように自分の言動に自信が持てなくなってしまった。自分の気持ちに合った言葉がなかなか見つけれないんです。どこか微妙に違っているような気がして、恐くて口に出せない・・・。

里子 お会いしなかった方が良かったのでしょうか？

健一 いえ、良かったと思います。あなたに会っていなければ、これまで通りの生き方をしていたと思います。気をつけてはいたんですが、大衆の代弁者だという自惚れがどこかにあったんですね。会社の看板を背負ってますとね、恐いなんて思いもしないんです・・・傲慢だったと思います。

里子 それに気がつかれたんですから、いいじゃありませんか。これからはもつといいお仕事がお出来になるわ。自分の信念を貫くことは大事なことです。ただそれが傲慢さに変わっていく時というのは、自分では気がつかないものかもしれませんね。私だって、自分が傲慢だと思ふときがあります

もの。でも正直言って、それぐらいのつもりで生きていかないと自分自身に始末がつけられないんです。

健一 この歳で言うのもなんですが、僕はあなた達と一緒に暮らせる日がくれればいいと思ってるんです。

里子 私には、そのつもりはありませんのよ。誤解しないでくださいね、あなたに限らず、他のどなたともです。

健一 隣人としてなら、どうなんでしょう？

里子 晴子さんが生きていらしたなら、それも楽しかったでしょうねえ……。でも、あなたには他にもっとご自分に合った生き方がありだと思いますが……。私にも私の生き方があります。自分で選んだ人生を生きたことが、いわば夢でもあり、理想でもあるんです。私はそのことのためにだけ生きてきたのかもしれないね。

健一 僕は、あなたが羨ましい……。

里子 羨ましい？ 何をおっしゃるんです、あなたは学生時代からの夢を実現なさったじゃありませんか。そして無事定年をお迎えになった。ご立派な人生だと思います。

健一 困ったな……。実は、もう二年前に退職してたんですが、つい、お話しする機会を逸してしまって……。

里子 そうでしたか……。そうじゃないかと思つた時もありましたが……。やっぱりなさってたんですね……。晴子さんがお亡くなりになる前ですか？ それとも、

健一 前です……。と言つても退職した日は晴子が死んだ三週間後ですが。

里子 (ホッとして) そうですか……。 (立ち上がって、そのまま海を見たまま) あなたはそういう人なんです。学生時代からそう、何をするかわからないところがありましたもの……。晴子さんが危ないとわかつたからですね？

健一 ええ……。

◀ やや間があつて、健一を責めるように、

里子 あんなに望んでお入りになった新聞社でしたのに、お辞めになつてしまふなんて……。

健一 (ハツとして立ち上がり) まさか、あなたはそのため、

里子 (健一に最後まで言わせず) そういう人なんです、あなたは。自分の誠実さや正義を貫かなければどうにも我慢できない人なんです……。

健一 なぜ言つてくれなかつたんですか……。

里子 何をですか？ わたしにはさつぱり……。

健一 あなたはいつもそうだ。僕にどうしろと言うんですか？

里子 (冷たく) 別に……今まで通りお好きになさつたらいいじゃありませんか？

健一 あなたの言つてることと態度はまったく逆なんですよ。なぜなんですッ。

里子 あなたはいつぞや、記憶というものは時間とともに変わつていくとおっしゃいましたね。

健一 ええ。

里子 そのとき私は、変わらない記憶もありますと申しましたが、覚えていらつしやいますか？

健一 ええ。その記憶というのは、あの夜のことじゃないんですか？

里子 さあ、どうなのでしょう。いずれにしても、今のあなたには関係ありませんわ。私の記憶ですから。

健一 またそれですか……そういう言い方はするんじゃないんですか？

里子 私ねえ、時間というものは人によつて感じ方が違うと思うんです。一年が十年に思われる時もあるれば、

その逆の場合もあります。あなたは先程、一瞬、学生時代を思い出したとおっしゃいましたが、その一瞬には何年にも相当する時間が凝縮されていたはずですよ。

健一 思い出したというよりも、僕はあの頃を生きているような、そんな気がした……。

里子 幸せでしたか？

健一 さあ、そこまでは……今、振り返って見れば確かに幸せだったと言えなくもないんですが、しかし思い出と記憶はちがいますからね……。

里子 私もそう思います。人はその時々状況によって、自分に都合のいい時間を選んでるんじゃないでしょうか。たいていは無意識にですけど……でもね健一さん、私の場合は、はっきり意識して時間を選んでんです。思い出にも記憶にも変わらない現在進行形の、と言ったらいいんでしょうか。私にとって変わらない記憶というのは、時間を選択したその一瞬なんです。過去でも未来でもないその一瞬に私の人生のすべてが凝縮されているんです。

健一 その一瞬を今も生き続けていると言うんですか？

里子 そうです。

健一 あなたは残酷な人だ……そのためには他人はどうなってもいいと考えているんですか？ ぼくにはそうとしか思えない。

里子 そう思っていたいただいてもかまいません。あなたは、女の気持ちというものを考えになったことがございいますか？

健一 女というより、僕は、男も女も同じ人間としてこの世に生きていると思っています。人間としての気持ちはならいつも考えているつもりですが。

里子 私は、男と女は違ふと考えています。それにねえ健一さん、同じ女でも当たり前のことですが、考え

方が違うんですのよ。私、晴子さんに初めてお会いした時、ああ、この方は私と同じような考え方をなさってる人だなんて思いました。

健一 同じような考え方、ですか？

里子 ええ、考える筋道の立て方が似ているのかもしれない。晴子さんは、理恵があなたと私の間にできた子供だと、信じていらしたと思いますか？

健一 さあ、どうなんでしょう。理恵さんはそう思っているようです……。

里子 理恵はともかく、晴子さんはどちらでもいいと思っただけじゃないでしょうか。
健一 えっ？

里子 奥様がなぜこの町にお墓を建ててほしいと遺言なさったのか、あなたはどのようにお考えですか？

健一 一言でいうのは難しいですね。いろいろありましたから。子供を産むことができなかったことが、晴子の心を複雑にしていたようです。砂浜は、晴子にとって大きな意味があったんです。

里子 足跡のお話でしょ？

健一 そうですか、あなたにも言ってみましたか……晴子はあなた方を信頼していたんでしょうね。そういう人たちのそばに眠りたかったんだと思います。

里子 晴子さんは私たち三人が一緒に暮らす可能性を断とうとされたんです。

健一 まさか……そんなことができる人間じゃない。

里子 あなたの性格からすれば、例えそういう条件が揃ったとしても、奥様のお墓がある土地ではお出来にならないだろうと、そのようにお考えになったんだろうと私は思います。

健一 こんな話を僕にするんですか……あの夜のことは僕の錯覚じゃない。

里子 (それには答えず) いろいろ考えてみました、やはり私には私の人生があります。もともと理恵に

健一 もあの子の人生があります。どう生きるか、それを選択するのはあの子の自由ですが……。

健一 それはもう聞き飽きました。あなたはいったい何を望んでるんですか？

里子 自分の愛する者が、いつもそばにいて無事であること、それだけです。無事に済まない状況に追い込まれても、無事に済むようにと……結果として私は子供を選んだ形になっただけ……。あなたは、流れに身を任せて、自分に都合のいい時間を待っていただけじゃありませんか？ 私は、自分で流れを変えて来たんです。私にとって、待つということは死ぬことと同じだったんです。この先も私は、私自身の考えで生きていくつもりです。でも、あなたの流れとは決して合流することはないと思います。

健一 あなたはそれで気が済むかもしれないが、しかし、どこか間違っている……。

里子 健一さん、女にとっては生きることが全てなんです。

健一 ……晴子も同じようなことを言っていました、女というより人間として言っていたように、僕は理解している。

里子 理恵はもう三十八です。やっとこの頃、女として生きること考えはじめたようです。人間としてじやなく、女としてですよ……あなたがここに移ってこられたら、理恵はいつかきつとあなたに好意を持ちます。いいえ、もう、持っているはずですよ。いつか理恵は、父親としてのあなたと、男としてのあなたとの間で必ず悩む日がくると思います。先程のあなたと理恵は、恋人たちのように見えましたが、でも、理恵は故意にそうしているのかもしれないですね……とにかく、わたしは理恵にもあなたにも、傷ついてほしくないんです。もう一度お考えになって下さい。理恵と結婚してくださいますか？もし、お嫌でしたら、あの別荘はお売りするわけにはまいりません。

健一 つまりは、そういうことだったんですか……あなたの話しぶりでは、理恵さんは僕に復讐でもしよ

うというふうには聞こえますが・・・ひよとしたら、晴子もそうだったかもしれない。しかし、復讐しようとしていたのは、里子さん、本当はあなたじゃないんですか？

里子 さあ、どうなんでしょうね・・・もしそうだとしたら、三十八年前から始まっていたことになりすわね・・・。

健一 僕が父親だから・・・そうなんですネ？

里子 健一さん、何度も申しませんが、理恵はあなたの子供じゃありません。(間) もういいじゃありませんか。私たちは、忘れても許されるに十分な、数え切れないほどの時間を過ごしてきたんですから・・・。

健一・・・そうですか、どうやら僕の記憶は、あなたとは違う時間を選択したようだ・・・。しかし、何を許されなきゃいけないんですか。あなたは、いや、もうよしまししょう。今まで通り、別荘の客のままでいた方がいいのかもしれない・・・僕は、明日、帰ります・・・。

◀里子、懐からおもむろに売買契約書を出して健一に見せる。それを破く仕草をして、同意を求めるように、

里子 いいですか？

健一 はい。

◀その瞬間、里子は契約書を二つに破り、

里子 どうぞ、いつでも気が向いた時においで下さい。私も理恵も、喜んでお迎えいたします。あなたはジ

ヤーナリストを志した方なんです。そのお仕事には定年なんてないんじゃないやありませんか？ あなた
の人生はこれからもっと素晴らしくなると、私はそう信じています。

◀ 里子、立ち上がると波打ち際に歩いて行き、破った契約書を海に投げようとするが、その時、「お母
さーん」と理恵の叫ぶ声がある。里子が慌てて契約書を懐に押し込んだところへ、理恵が駆けてく
る。

理恵 お母さん、ほら。(と、手のひら一杯のアサリを見せる。)

里子 まあ、アサリ！

健一 えっ、アサリ？

理恵 今日は大潮だったの。

◀ 第一場と同じ音楽が流れてくる。その時上手から、両方の手のひらにアサリを持った晴子が嬉しそ
うにやって来る。その気配を感じた健一が、晴子を見ると同時に舞台、暗黒になって、

